HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Effects of Interdependence Frame and Affective Entertainment Experience in the Context of Parasports on Attitudes toward People with Disabilities [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	塩梅, 弘之
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15617号
Issue Date	2023-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90903
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hiroyuki_Shioume_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

（様式４）

学位論文内容の要旨

国際広報メディア：博士（国際広報メディア）　　氏名：塩　梅　弘　之

学位論文題名

Effects of Interdependence Frame and Affective Entertainment Experience in the Context of Parasports on Attitudes toward People with Disabilities

（パラスポーツにおける共生フレームとエンターテインメントの感情経験が障害者に対する態度に及ぼす効果）

共生社会は、オリンピック・パラリンピックが目指すところであるが、障害者競技団体の広報は、障害者に対する偏見解消を目的としたメディアコンテンツの制作において、社会的に繊細な問題を含むため、その制作に苦心してきた。このような課題を解決する糸口としてフレーミング理論がある。フレーミングは、情報内の特定の要素に注意を引くことにより、認知処理や特定の社会的態度の形成を促進させるという考え方である。健常者と障害者の共生に関するメディアフレームとして「共生フレーム」と呼ばれるフレームが存在しているが、その実証的効果についてはまだ検証されていない。

日本において、パラリンピックに関するメディアコンテンツが一般的になり、障害者スポーツと障害者問題への意識を高める上で、「エンターテイメント性」の果たす役割が認識され始めてきた。快楽的なエンターテインメント経験と比較し、ユーダイモニックな（有意味な）エンターテイメントコンテンツは、深い思考の導因となる有意味経験（appreciation）を引き起こす。このようなコンテンツは向社会的な行動につながり、ステレオタイプ的な思考の低減に導くことが先行研究で示されている。有意味経験を引き起こす手がかりとして、パラアスリートの写真にしばしば確認される「笑顔」が考えられる。笑顔が手がかりとして働き、コンテンツにエンターテインメント性があるものとして受け手に認識させる可能性がある。しかしながら、先行研究においても、笑顔が常にユーダイモニックなエンターテイメント経験を引き起こすことは確認されていない。さらに、有意味なエンターテインメント効果とフレーミング効果の心理的プロセスの関連性も明らかになっていない。信念内容の変容（belief content change）はフレーミング効果の心的変容結果の一つであり、本研究においてはこの変化を検証する。

具体的には、パラリンピックに関するオンライン記事内の共生フレームとパラアスリートの写真が、障害者一般に対する態度におよぼす効果の心理的プロセスを明らかにする。また、写真がどのようにフレーミング効果の心理的プロセスに影響するかについての検証も行った。2（文章：相互依存フレーム vs.フレームなし[競技歴のみ]）×3（写真：笑顔のパラアスリート vs.非笑顔パラアスリート vs.写真なし）の被験者間デザインを用いたオンライン実験（n = 316)を行った。パラスポーツと障害問題について異なる度合いの知識を持つ日本人参加者を対象に実験を実施した。本実験では、上記の文章と画像で構成されるオンライン記事（全６種類）が無作為に表示されるように設定した。

検証結果は、部分的に仮説が支持され、効果に関しては多様な帰結を得ている。まず共生フレームと写真は４つのプロセスを通して障害者に対する態度に影響を与えている。まず、直接的な正の効果は感情的態度に限定されることが示された。第二に、規範的メタ感情（normative meta-emotion）は、記事内のパラアスリートに親近感を抱いた後のフレーミング効果に影響を与えることが示された。第三に、社会的比較感情である親近感（closeness）は共生フレームの効果を媒介し、認知的態度に影響を与えることが分かった。第四に、共生フレームの効果は、障害者に関する信念や感情的・認知的態度に正の変化を引き起こすことが示された。相互作用効果に関して、笑顔の

写真は共生フレームの正の効果を弱めることが示された。この結果は実務上重要な意味があり、マスメディアでよく見られる笑顔のパラアスリート写真は、文章内容によってはパラリンピック記事の写真素材として最適ではない可能性があることを意味している。本論文ではこれらの帰結を踏まえ、多様な実務的貢献についても議論を行っている。

本論考は、全体として６章で構成されている。第１章に関しては本研究の意義がまとめられ、障碍者スポーツと現代社会の関係が考察され、障害者スポーツ研究の意義が検討されている。第２章においては先行研究の検討が行われ、フレーミング理論、フレーミング理論と障碍者スポーツ、障害者スポーツにおけるエンターテイメント性、特にユーダイモニック・エンターテイメント性に関す検討が行われている。第３章に関しては本研究で用いられる変数、概念等の検討、及び仮説設定が紹介され、第４章ではマニュピュレーションチェックを含めた本研究の方法論が紹介され、第５章においては、本研究のサンプル構成、仮説検証結果と分析結果が述べられている。第６章では、前章の結果に関する考察が展開し、本論考の学術的貢献と実務的貢献が整理され、本論考のまとめとして結論が述べられている。最後の部分では、本論考の限界と将来的課題が描写されている。なお、補遺として、本論考で用いられた調査票や写真、記事も記載されている。